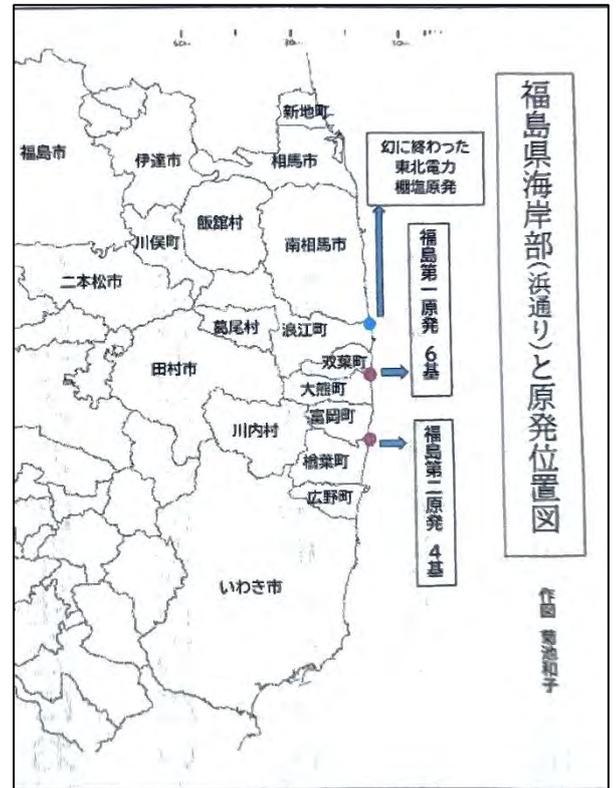


東京電力「福島第二原発」、東北電力「浪江・小高（棚塩）原発」反対運動に参加して

福島県相馬市 志賀勝明

0. はじめに

私は、1948年福島県南相馬市小高区（旧小高町）の海岸付近の村上地区に生まれ育った。家は代々半農半漁を営んでおり、私も高校卒業後すぐに漁業に就くことになり、木造船を新造してもらった。初め船酔いがひどく、ずいぶん苦しんだ。東京電力「福島第一原発」は1971年にそれほどの反対運動もないまま稼働を開始していた。すぐに「第二原発」の建設計画がもち上がり、地元でもその危険性が叫ばれ始めた。



1. 1973年7月 富岡町の旅館海遊館にて、安齋育郎氏（現 立命館大学名誉教授）、堀孝彦氏（当時 福島大学教授）を招き学習会が開催され、当時 25 歳だった私も参加した。原発は現段階では安全性が保障されていない未完成な技術であり、商業運電は危険極まりないことを実感した。

※原発 100 万 kw から排出される温排水は毎分 50 + にもおよび、阿武隈川 1 本分に相当する。

2. 1973年9月 「福島第二原発」原子炉の設置許可について、福島市にて公聴会が開かれた。

陳述人は42人（原発稼働賛成者27人、反対者15人）で、そこで私は反対の陳述を行った。

その頃、小高町も浪江町も漁業者のほとんどは原発建設に賛成だった。特に私が所属していた浪江町の漁業組合の組合長は、浪江町町議会議員で、もちろん賛成派の筆頭の方だった。町も町民もほとんどが賛成の中で、私はひとり反対陳述を行ったわけで、その後は大変風当りの強い、村八分のようなひどい目に遭うことになる。

例えば、公聴会の直後、同年10月頃いわき市で漁業組合青壮年大会があり、その大会の帰路、双葉町の料理店で反省会が参加者30名ほどで行われた。そこで私はみんなから「公聴会で原発反対陳述をすることは何事だ、あの原稿は誰が書いたのか。今後は執行部に見せてから発表せよ」と、吊るしあげられた。誰も味方をする人もなく、本当につらい反省会であった。

3. 1974年5月 「浪江・小高（棚塩）原発」の建設計画が東北電力で進められ、浪江町議会では1967年に早々に誘致決議が行われていた。浪江町請戸漁協でも74年に通常総会で組合長が原発誘致に賛成する決議を組合員に求めた。そこで私は、「賛成、反対双方の学者の話を聞いてから結論を出しても遅くはないだろう。」と提案し、できるだけ誘致決議を引き延ばそうと努めた。組合長はその場では否定できず「では、そうするか！」と言って決議をあきらめたのだが、組合長が開いたのは賛成派の学者の講演だけで、ついに反対派の学者の講演は開かなかった。

同年6月 漁協青・壮年部長、副部長から「お前はどこまでも原発に反対だから青年部はやめてもらうから、沖で何があっても助けることはできないからな！」と脅され、除名されてしまった。それ以後、5～6年は漁業者から話かけられることはなかった。自分の身は自分で守る

ことを決意し、漁に出るときはエンジンを始動する前に冷却水・潤滑油・燃料をしっかりと厳しく確認、点検することにした。

4. 1975年 原発県連の住民404名が「福島第二原発」設置許可処分取り消しを求め、福島地裁に提訴。私は漁業者から一人、原告となる。これについても「裁判の原告に入っているのか」と問いただされ、思わず「知らない」などと、ごまかしたりした。

5. 同年 小高町連合青年団長になる。東北電力「浪江小高（棚塩）原発」の建設を何とか阻止しようと、日本科学者会議の中島篤之助氏を講師に招き、小高公民館で原発の安全性について講演会を開いた。約60名以上が参加、中島氏は原発の危険性について様々話してくれた。アメリカ以上に日本の科学者は原発を楽観視し、リスクを低く考えていること、また放射能の廃棄物の処理の問題点、石油より原子力に誘導することが強調されている等、現在も変わらぬ問題点をこの当時からすでに指摘されていた。

2013年3月28日、「東北電力浪江・小高原発」建設計画は断念された。これは、舛倉隆氏らが土地を絶対に売却しなかったこと、大震災の第一原発の事故、そしてささやかでも私たちの反対運動の成果かとうれしく思う。粘り強く運動を行って来て、全く後悔はない。様々な苦労はあったら、本当に良かったと心から回想している。

6. 「福島第一原発」事故後の放射能汚染について

原発建設反対運動に参加、原発事故後のこと

志賀 勝明（相馬市、震災前の居住地：南相馬市小高区村上）



<写真>鈴木安蔵旧宅の前で

50年間原発に反対してきて悔いは無い

私は1948（昭和23）年7月、小高町（現・南相馬市小高区）の海岸付近の村上に生まれ育ちました。家は代々半農半漁を営んでいましたが、私も高校卒業後すぐに漁業に就くことになり、木造船を新造してもらいました。初めは船酔いがひどくて随分苦しみました。

東京電力「福島第一原子力発電所」は、1971（昭和46）年にそれほどの反対運動もないまま稼働を開始していました。すぐに「福島第二原子力発電所」の建設計画が持ち上がり、地元でもその危険性が叫ばれ始めていました。

25歳の1973（昭和48）年、富岡町（現・南相馬市）の海遊館で原発についての学習会が開催され、私も参加しました。それまで私は原発については特に何の疑問もなく、全く白紙の状態でした。でも当時の小高町福浦農協専務理事の草野太（まさる）さんに参加をすすめられ、大きく意識を変えることになりました。今思うと、錚錚たる学者さんや弁護士さんが50名以上も参加し、本当に熱心な学習会でした。原発反対の陣頭指揮を執っていたのが安斎育郎氏で、福島大学教授だった堀孝彦氏や真木實彦氏（現・福島県九条の会）からも参加し、50年も前から反対運動が現在まで脈々と一貫して続いてきたことを思い知らされます。

その学習会で特に印象に残っていることは、「原発からは毎日、阿武隈川の水量以上の、しかも高温の排水が海に流されていること」、「第一原発の1・2・3号機は90度も向きが間違っただけで設置され、大きな事故に結びつく可能性があること」という説明に、本当に大きなショックを受けました。

そして同じ年の昭和48年9月18日、福島市で「東京電力福島第二原発」の公聴会が開かれ、私はそこで反対の意見陳述を行いました。昭和48年9月19

日付けの『福島民報』には、私の「排水の影響が心配で反対」という陳述要旨がきちんと掲載されています。

その頃、小高町（現・南相馬市小高区）も浪江も漁業者のほとんどは原発建設に賛成でした。特に私が所属していた浪江町請戸漁業組合の組合長は浪江町の町会議員で、勿論原発賛成派の筆頭の方でした。町も町民もほとんどが賛成の中で、私はひとり反対陳述を行ったのですから、その後は大変風あたりの強い、村八分のようなひどい目にあうことになりました。

たとえば、公聴会直後の10月頃、いわき市で漁業組合青壮年大会が開かれ、その大会の帰路双葉町の料理店で参加者30名ほどの反省会がありました。そこで私はみんなから、「公聴会で原発反対陳述をするとは何事だ。あの反対の原稿はだれが書いたのか。今後は執行部に見せてから発表せよ」と吊るし上げられました。さらに私は「福島第二原発」の反対訴訟原告団404名の一人として入っていましたが、それにも対しても「裁判の原告に入っているのか」と問いただされ、思わず「知らない」とごまかしたりしました。だれも私に味方する人もなく、本当に辛い反省会でした。

次に「浪江・小高（棚塩）原発」の建設計画が東北電力で進められ、浪江町議会では早々と1967（昭和42）年5月に誘致決議が行われていました。浪江町請戸漁協でも昭和49年の通常総会でその誘致決議をしようとしていました。そこで私は「賛成、反対のそれぞれの意見を出しあう学習会を開いてはどうか」と提案し、できるだけ誘致決議を引き延ばそうと努めました。でも、はじめから賛成の組合長は賛成の学者だけを呼んで学習会を開き、ついに反

対派の学者を呼ぶような学習会は開こうとはしませんでした。

そして同年秋の頃か、私はとうとう「浪江町請戸漁協青壮年部」を除名されてしまい、「海に出て何かあっても、おまえを助けないぞ」と脅されました。本当にひどく辛い話です。ですから私は、海でも自分の身は自分で守るしかないと考え、漁に出る時は燃料と潤滑油、冷却水をしっかりと確認して、船の点検を厳しくすることにしました。

そんなことがあった翌年の昭和 50 年のこと、27歳の私は小高町連合青年団の団長になりました。そこで「浪江・小高（棚塩）原発」の建設をなんとかして阻止しようと、日本科学者会議の中島篤之助氏を講師に招いて、小高町公民館で講演会を開きました。約 60 名が参加してくれましたが、中島先生は原発の危険性をさまざま説明し、日本の科学者はアメリカ以上に原発を楽観視していてリスクを低く考えていること、また放射能の廃棄物処理の問題点や、石油より原子力に誘導することが強調されているなど、現在も変わらない問題点をその頃すでに指摘されていたのです。

ところが、2011 年 3 月 11 日に東日本大震災と福島第一原発事故が起きて、2 年後の 2013 年 3 月 28 日に、「浪江・小高（棚塩）原発」の建設計画は断念になりました。それは、一貫して建設反対運動を行ってきた舛倉隆さんらが土地を絶対に売却しなかったこと、また大震災の福島第一原発の事故が起きたこと、そしてささやかでも私たちの反対運動の成果でもあると嬉しく思っています。もう 50 年間も粘り強く反対運動を行って来て、様々な苦勞はありましたが全く悔いはありませんし、本当に良かったと心から思っています。

震災後、被災地案内に鈴木安蔵宅を加える

3.11 の東日本大震災と福島第一原発事故が起きて、私の人生も一変しました。大津波で小高区村上の沿岸部の自宅は破壊され、浪江町の請戸港に停泊していた持ち船も流されて、さらに事故原発から 20 km 圏内に住んでいた私たち家族は避難生活を強いられ、しばらくの間私は仕事に就く意欲も無くし、不安な

日々を過ごしていました。

ところが、2013 年の秋に「福島県九条の会」から浜通りの被災地の案内をして欲しいとの依頼がありました。私は初めは不慣れでしたが、全国からやってくる被災地視察の方々を南相馬市原町区、浪江町の請戸小学校や希望の牧場、双葉町などに案内しますが、同時に小高区の憲法学者鈴木安蔵氏の住宅を気持ちを込めて案内しました。鈴木家のご子孫家族は老舗「林薬局」の店名で医薬品販売業を営んでこられましたが、原発事故で横浜市に避難されていて住宅はずっと留守になっていました。

鈴木安蔵氏については、もちろん以前から小高区の佐藤鶴雄さんのお話や、立正大学名誉教授の金子勝先生や元福島大学学長の吉原泰助先生の講演や著作で「日本国憲法の間接的起草者」としての歴史的な業績は知っておりました。震災前から私は「小高九条の会」の世話人として活動を行っていて、特に鈴木安蔵氏を主人公にした 2007 年の映画『日本の青空』は、「小高九条の会」と「はらまち九条の会」が協力して、全国に先駆けて小高区と原町区で特別試写会を開催しました。ですから全国各地から被災地視察にやってくる皆さんに、さらに広く鈴木安蔵氏を知っていただきたいと、誇りを持って説明しました。その後も案内の依頼が次々に入ってきて、これまで 8 年間で案内した人数は約 5 千人になると思います。

「鈴木安蔵を讃える会」を設立

やがて 2017 年になって、旧知の間柄だった鈴木千代様から私のところに「旧宅を取り壊すつもりです」という連絡をいただき、私は大きな衝撃を受けました。郷土の偉人で歴史的憲法学者鈴木安蔵氏の旧宅ですから、なんとかして残してほしいと考えました。何度かのやりとりで鈴木様ご家族の理解を得ることができ、工事関係者にもお願いして取り壊しは店舗部分だけにして、由緒ある鈴木家住宅の主屋はそのまま保存していただくことができました。

そこで、私は事務局員になっている南相馬市原町区の「はらまち九条の会」に働きかけていただき、前南相馬市長桜井勝延氏のお力添えにより、鈴木家

住宅は2018年11月2日に国登録有形文化財に指定されました。さらに、2020年夏に市教育委員会のご指導を受けて、知人友人たちと相談を重ねて「鈴木安蔵を讃える会」を設立しました。同年12月から会員募集の呼びかけを開始したところ、全国から次々に応募があり驚きました。2021年11月15日現在会員と協力金応募者は300名に達し、心から感謝しています。皆様の鈴木安蔵氏への思いやその業績を讃え、さらに世界平和をめざし時代を先取りした日本国憲法、特に第9条を護ろうとする熱意に心打たれています。

会長に推挙された私ですが市民運動などの経験もなく、これからの鈴木家住宅の維持、管理、活用など会の運営も不安ばかりですが、南相馬市や皆様のご指導やご支援をいただきながら努めていくつもりです。

無責任な原発汚染水の海洋投棄

現在、事故原発の汚染水の海洋投棄が大問題にな

っていますが、国や現政権、東京電力の無責任さに呆れています。

漁民や農民、福島県民の大反対を全く無視して、勝手に海洋投棄を決定し、その風評被害の補償などに問題点をすり替えています。一端海洋投棄を始めたら、福島の魚も農産物も市場で売れなくなったり、買いたたかれることになることは明らかです。私達だって、不安がある食品を避けて安全なものを買って求めることは当たり前のことです。国や政権に付度してきちんと態度を打ち出さない福島県や知事の態度にも腹を立てています。

今後汚染水の海洋投棄をすれば国際的に大きな批判を浴び、日本の国際的な信用も失うことになるでしょう。韓国や中国などアジアの国々の批判には、居直って「安全なレベルなのに」と逆批判するのでしょうか。

私は元漁民の一人として、汚染水の海洋投棄には絶対に反対で、本当に安全な水になる解決策が生まれるまで陸上で保管するしかないと思っています。

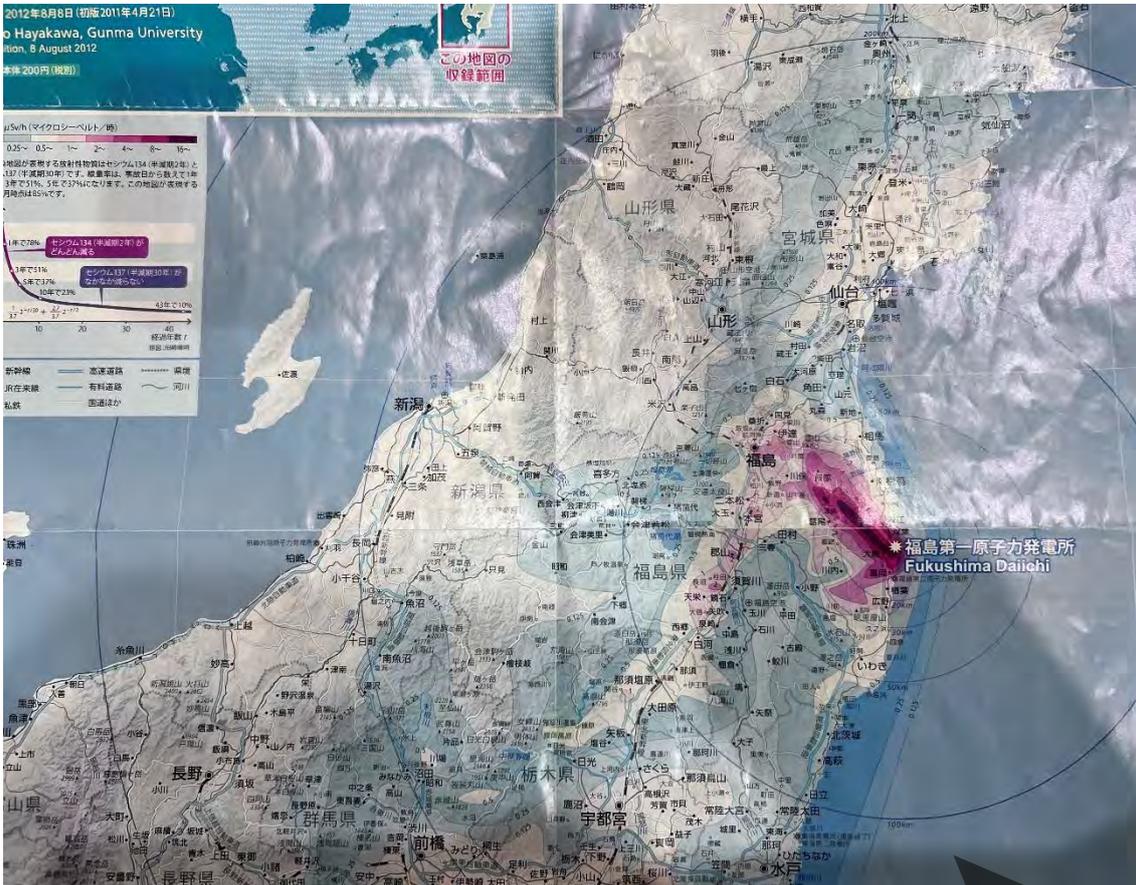
【コラム／震災関連資料】その1

表1 全国への避難者数

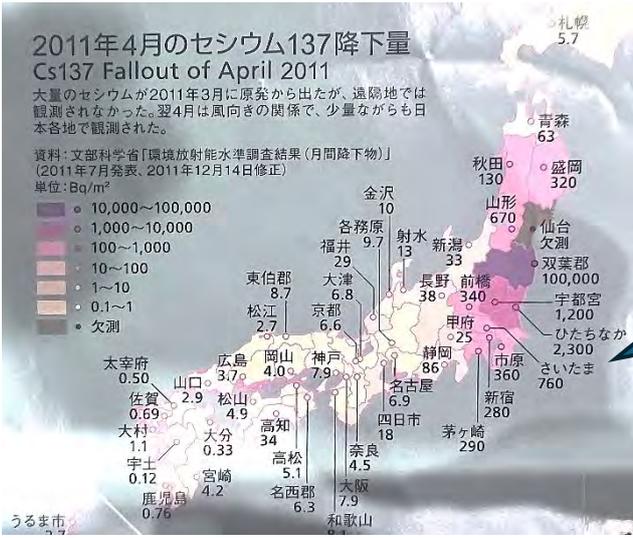
表 全国への避難者数		
	避難者総数	都道府県の避難者数
北海道	801人	
東北	4,845人	青森 152、岩手302、宮城2724、秋田329、山形1338
関東	12,355人	茨城2767、栃木 2651、群馬493、埼玉2563、千葉2058、神奈川1823
東京	2,890人	
中部	4,191人	新潟2019、富山 93、石川 45、福井 47、山梨382、長野 493、岐阜116、静岡329、愛知503、三重 64
近畿	993人	滋賀 98、京都198、大阪259、兵庫381、奈良38、和歌山19
中国	458人	鳥取34、島根47、岡山176、広島154、山口47
四国	87人	徳島16、香川27、愛媛22、高知22
九州	623人	福岡293、長崎37、大分54、熊本49、宮崎148、鹿児島42
沖縄	114人	
全国	27,357人	

2022年1月15日現在

復興庁の資料から



2011年9月時点の放射線量率



日本各地でセシウムが観測される

○原発稼働停止による砂浜の変化(浪江町請戸)



2009年11月



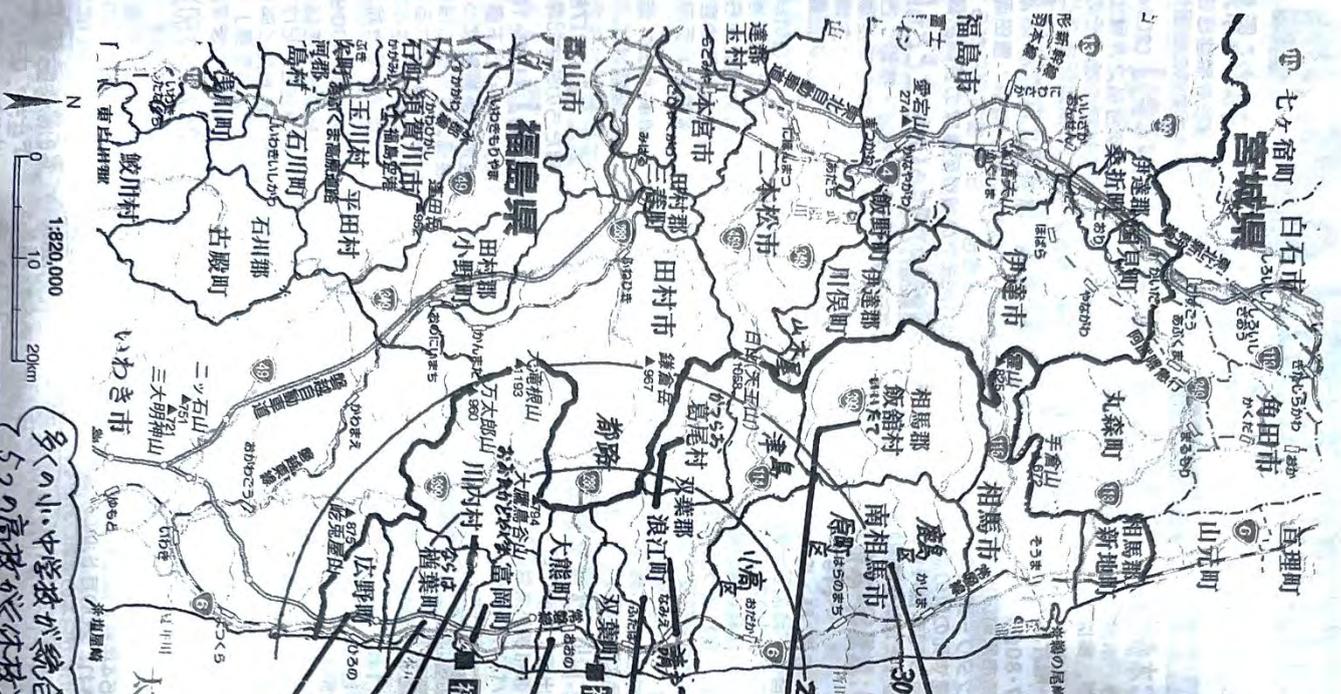
2020年3月

原発事故被災地に住民はもう戻りません

3.11の不条理 《南相馬市以南の原発事故・旧避難指定地域》
原発事故による人口減少、学校の變動、児童生徒数の激減ぶり

＜『福島県教職員録』2010年版・2024年版より＞

こんな原発事故は
 日本でも、
 いつでも起るんです



18

多くの小・中学校が統合や閉校、
 5つの高校が「休校」別の廃校!

震災前、2010年4月1日の生徒数	震災14年目、2024年4月1日の生徒数
南相馬市 鹿島小317、真野小15、八沢小120、上野野小141、鹿島中324	鹿島小352、上野野小62 → 真野小2014年に、八沢小は2023年度で閉校、鹿島中245
相馬市 原町一小1588、原町二小1327、原町三小1538、高平小193、大塚小204、太田小135、石神一小187、石神二小1487、原町一中503、原町二小307、原町三小170、石神中315	小1106、大塚小102、太田小39、石神一小88、石神二小351、原町一中341、原町二小188、原町三小63、石神中152
南相馬市 小高区 小高小392、福浦小105、金馬小143、楳原小65、小高中386、小高工業高校588、小高商業高校217	705人の4校を統合⇒小高小87、小高中34、I・商の2高校が統合⇒小高産業技術高校341 (小高区人口12,842人⇒3,839人)
飯館村 草野小153、飯館小132、白石小62、飯館中184、相馬農業高校飯館校88 (2025)、浪江高校315、浪江高校津島校53	小中校531人⇒村立いたて希望の里学園80 (1年～9年69・特支11) ⇒相馬農業高校飯館校(福島市に避難、入学者減で2020年4月に休校)
浪江町 浪江小1558、養世南小122、清戸小193、大塚小157、刈野小174、津島小158	6校1162人を統合⇒町立なみなみ創成小学校48、3校611人を統合⇒町立なみなみ創成中学校24 ⇒浪江高校・浪江高校津島校《休校》
双葉町 双葉南小192、双葉北小152	双葉中17 ⇒双葉高校《休校》
大熊町 大熊中371	小中校1127人⇒町立学び舎ゆめの森34 (1年～9年33・特支1) ⇒双葉翔陽高校《休校》
富岡町 富岡一中小145、富岡二小152	2校936人を統合⇒富岡小61人、2校550人を統合⇒富岡中21人 ⇒富岡高校《休校》
川内町 川内小112、川内中54	小中校166人⇒村立川内小中学校71 (1年～9年)、⇒富岡高校川内校(生徒減で閉校)
楳葉町 楳葉南小158、楳葉北小124	432人の2校を統合⇒楳葉小153、楳葉中65
広野町 広野小141、広野中126	⇒ふたば未来学園中学校79・ふたば未来学園高校450(双葉郡内の休校した5校に替わり、2015年4月)
野田町 野田小230	⇒ふたば未来学園中学校79・ふたば未来学園高校450(双葉郡内の休校した5校に替わり、2015年4月)
合計	小・中学生12,030人⇒3,526人(29.3%)、高校生3,448人⇒1,461人(42.4%)

19